

ウチからソトへ発信する海外初級プロジェクトの実践
—ローカルガイドの執筆から、地域日本人への発信へ—

Publishing Students' Articles Written for a Singapore Guide Project in a Local Japanese Magazine:
From the Classroom to the Local Community

北井佐枝子 (シンガポール国立大学)・藤井陽子 (シンガポール国立大学)
KITAI Saeko (National University of Singapore), FUJII Yoko (National University of Singapore)

要 旨

海外では初級学習者が教室外で日本語を使用する機会は限られている。学習者が書いたローカルガイド作品を地域日本語情報雑誌に出版することによって、海外初級学習者でも日本人読者に対して実践的な日本語使用ができ、また、学習者の日本語学習の継続を促すことができた。さらに、学習者はその雑誌を読むことで地域日本人社会に対する理解と洞察を深めることができた。メディアの利用は著作権や作文の校正等の問題を含むが、教師が支援しながらうまく利用すれば学習者の動機や学習効果を高めることができるであろう。

In overseas Japanese language learners have very limited opportunities to use the language outside of the classroom or to speak with Japanese people. The publication of local guide articles in a Japanese community magazine provides students with opportunities to use the Japanese language in real life situations and to gain some knowledge of local Japanese people through the magazine. It also motivates students to continue studying the language. Although the use of media contains some issues regarding copyrights when editing students' work, it is considered as a means in raising students' motivation and their learning effects if the teachers give their full support in this endeavour.

【キーワード】海外日本語学習者の日本語使用環境、初級プロジェクト、メディアの利用、作文の校正、異文化理解

1. 学習者が書いたローカルガイドの出版の目的

シンガポールの日本語学習者が教室外で日本語を使用したり、日本人と接する機会は限られている。日本国大使館に届を出しているシンガポール在留邦人は2008年10月現在で23,583名で減少傾向ではあるが、都市別の数としては世界第7位で少なくはない。しかし、内訳は永住者は1,306名(5.5%)で、在留邦人の永住者割合の世界の平均32.34%より大幅に低い。長期滞在者は22,277名、民間企業関係者とその家族が18,816人で85%を占め、永住より一時的な長期滞在が圧倒的多数である⁽¹⁾。邦人子弟も現地校でなく日本人学校に通うことが多く、シンガポール日本人学校は生徒数は1700名を超え、世界の日本人学校の中でも大規模な学校だとされている⁽²⁾。矢野(2004)はシンガポールで「日本語でコミュニケーションを行うことができる環境を持つ学習者は極めて少数である」と指摘している。シンガポール国立大学でも日本語初級クラスでは教師以外の日本人に接した経験がないという学生が大半である。

Harrison(2008)は言語習得過程における社会的インタラクティブ理論を検証し、グループでの学生新聞とビデオ制作の例をあげ、メディアの利用を肯定的に評価している。本プロジェクトはもともとは学生が執筆したローカルガイドを学生同士で共有することを目的としていたが、それを地元の日本語情報雑誌を通してシンガポール国内の日本人社会に発信することができれば、学習者に日本社会との繋がりを築かせ、生きた日本語を使用する機会を与え、学習者の学習動機を高めることができると考えた。

2. 「わたしのシンガポールガイドーわたしの好きなところ」プロジェクトについて

2-1 シンガポール国立大学「日本語 2」

シンガポール国立大学 (National University of Singapore, 以下 NUS) では全学部の学生が選択科目として日本語を履修することができ、「日本語 2」は NUS で「日本語 1」を取得、または同程度であると認められた学生が履修することができる。日本語は人気科目ではあるが、選択科目であるがゆえに初級の早い段階で履修をやめてしまう学生も多い。NUS の「日本語 2」の使用教科書は『Minna no Nihongo Elementary 1-2 Main Textbook Asian Edition』⁽³⁾で、これは『みんなの日本語初級 I 本冊』⁽⁴⁾を分冊にしたもので、内容は『みんなの日本語初級 I 本冊』の 14～25 課と同等である。NUS は 8 月と 1 月に始まる 2 学期制で、日本語の授業は最初の 2 週間は週 2 時間、残りの 11 週間は週 7 時間、祝日等がなければ最長で合計 81 時間行われる。

2008-2009 年度前期「日本語 2」は 130 名が履修した。そして、学期後半にプロジェクトとして「わたしのシンガポールガイドーわたしの好きなところ」を実施した。これは前年の「日本語 2」の担当教師である齋藤亨子氏が「わたしのシンガポールガイドーわたしの好きな店」として考案・実践したプロジェクトに手を加えたものである。

2-2 筆記タスク

学生はワード文書で 1 人 A4 サイズ 1 ページが割り当てられ、自分が好きなシンガポールの場所を選び、それについて行き方、情報、意見等を記述する。執筆は基本的に宿題で、教師は 2 回添削をした。できあがった作品は各クラスの口頭発表の際に各自で印刷、持参、教室内の壁に掲示し、クラスメートのガイドを閲覧した。また、口頭発表終了後にワード文書をデジタルでも提出させ、教師が PDF に変換、科目内のウェブサイトアップロードし、自分のクラスだけでなく 130 名全員のガイドを閲覧可能にした。

2-3 口頭タスク

学生は授業時間内に自分の選んだ場所をアピールするような発表をする。口頭発表は友人同士の普通体の会話と聴衆に向かって話す丁寧体の両方を含むことを課題とし、発表原稿は学生が自分の選んだ場所について各自書いたが、発表はペアで行った。教師は 1 回だけ発表原稿を添削した。発表当時は学生同士が情報を共有することだけを目的としていたので、特に録画等の記録はしなかった。

3. 出版にあたって

3-1 出版前の経緯

130名分のガイドブックを作成した学期の終了後、完成したローカルガイドを地域日本人社会に発信することはできないかと考えた。そこで、シンガポールで月2回2万部を無料配布している日本語情報雑誌『JPLUS』の編集者に2008年12月に話をもちかけ、2009年3月より「What's Hot in Singapore? ～シンガポールのおすすめスポットをNUSの学生が紹介します～」という企画で10名の学生の記事が連載されることになった。この10作品は雑誌編集者によって選ばれたが、教師の視点とは違い、学生の日本語力にかかわらず商業的な店より観光的なスポットが好んで選ばれた。

3-2 雑誌編集者からの要請

雑誌編集者は学生が書いたものであるという趣旨をふまえて、学生の文体を残すことを前提に掲載することを約束してくれた。プロジェクトで作成したA4サイズ1ページのガイドのワード文書に加えて、案内人としての各学生の顔写真と50字程度の自己紹介文の提出、大学のロゴの使用許可、学生が書いたガイド文と使用した写真の著作権の確認の要請があり、また教師に各学生との連絡と最終原稿の校正を依頼された。

3-3 著作権、大学のロゴについて

著作権について編集者の依頼を受けて大学の規定を調査したところ、科目の試験の答案に書いたものや課題で提出したものの著作権は基本的に書いた本人にあるが、返却しない限り大学が保管し、また、それを営利目的にした場合は報告義務があり、その利益は学生・学部・大学が所定の割合で享受すると規定されていることも判明した。今回の出版は無料配布の地域雑誌で原稿料を受け取ることもなかったので、大学への報告義務も発生しなかった。

大学のロゴについては大学の担当部署へ使用許可を要請したが、大学と出版社の間に正式な協定関係がなければ、外部出版にロゴの使用許可は出せないとの返事があった。また、学生の作品を無料配布の地域雑誌に掲載した前例もないことから、ロゴは使用できなかった。

3-4 連載中の経緯

2009年5月末に編集部から追加8名の学生の記事の掲載要請を受けた。連載当初から毎回、読者から直接感想や意見が得られるように専用のメールアドレスを併記してもらっているが、2009年9月末までにコメントは寄せられていない。しかし、編集部にはシンガポールの大学生が頑張っている様子や日本語を勉強している様子がうかがえて好感が持てるなど、日本人読者の肯定的な声が届いているようだ。2009年9月末までに14作品が発表されている(5)・(18)。

3-5 校正

自己紹介文を依頼すると最初の10名はほとんどが「日本語1」で学習したような名前、年齢、国籍、どうぞよろしくという定型文のみの自己紹介文になってしまった。趣味や好きなものを書かせると今度は大幅に規定の文字数を無視してしまい、結局学生が書いたものを元にして教師が規定の文字数内に編集し、学生の許可を得る作業を行った。追加の8

名に関しては最初の10名の自己紹介を見本として提示してから依頼した。多少の文法ミスなどは見られたが、ほとんどが趣味や好きなものを織りまぜながら適切な自己紹介文が書けた。

ガイド文に関しては、編集者は学生の10作品を選ぶ際にすでにその内容に合わせて魅力的なサブタイトルを日本語でつけていて、学生が書いたキャッチコピーは採用されなかった。また学生がつけた場所の5つ星評価も雑誌には採用されなかった。

編集者との最初の話し合いでは、わかりにくい文章は編集者が手を入れるということであった。しかし、実際には初級日本語学習者が使わないような語彙や文の修正案が出てきたので、結局、教師が修正し、学生の許可を得るという作業になった。しかしながら、編集者が直前に行く編集では出版直前の修正で学生の許可を得る作業が間に合わず、印刷に回された後から学生の合意を得たり、教師が確認したあと版下で学生の名前に誤植があったりという間違いも起こってしまった。

3-6 校正における問題点の対処

校正はプロの編集者に手を入れてもらえるのだから、それだけで十分であろうと考え、出版が決まった当初はさほど問題意識を持っていなかった。しかし、編集者から初級日本語学習者が使わないような語彙や文の修正案が出てきたことから、教師も手を入れざるを得なかった。それ以降、編集者に修正が必要だと思う部分をチェックだけしてもらえるようお願いしたが、実際には編集者がチェックした部分にはほとんど修正案がついていた。

プロの編集者の修正案はなるほどうなずけるところもあり、それが学生の意図するところで、学生の日本語能力に相応するものには同意させていただいた。しかし、そうでないところは学生が知りうるであろう語彙や表現に近いところで代替案を提示したり、また修正してもらいたくない場合はその理由も提示した。実は、出版前に著作権の確認をした際に著作権は学生ではなく基本的に大学にあると誤った理解をしてしまったが、半年ほどあとで著作権は基本的に書いた本人にあることが判明した。もともと学生の言葉を極力尊重していたが、特に著作権が学生にあることが判明してからは学生の言葉を一層尊重するように努めた。

また、学生の意図を確認する前に印刷に回されるという事態が起きてからは、問題になりそうなところは編集者が最終原稿を送ってくる前に学生に連絡をとり、できるだけ学生の文が生きるようにあらかじめ校正して、編集者に送付した。

さらに、教師が確認した後に版下で誤植があつてからは、教師が版下も確認させてもらえるようにした。

教師は学期中にガイド文の添削を2回行い、たいていの間違いには直接修正せずにヒントのみを与え、学生に自己修正をさせていた。今回出版にあたって、それをさらに修正してしまうと学生の言葉ではなくなってしまうおそれもあり、どこまで修正していいのか判断に迷うところであった。

4. 学生の反応

2009年9月中旬時点までにガイドが掲載された学生11名に対して出版後順次に自由記述形式のアンケート調査を英語で実施し回答を得た。質問（日本語訳）は以下の11項目

である。

0. 出版前から『JPLUS』や他の日本語情報雑誌を知っていたか。
1. 自分の記事が選ばれたことについてどう思うか。
2. なぜ自分の記事が選ばれたと思うか。
3. 出版された雑誌を誰かに見せたか。雑誌をどのように活用したいか。
4. 雑誌掲載までの校正の過程についてどう思うか。
5. もし雑誌に掲載されると知っていたら、ガイドの場所・内容は違っていたか。
6. 雑誌掲載が日本語学習の継続の動機づけになったか。
7. 実際に日本語学習を続けているか。
8. 機会があれば、今後日本人向けにどのような記事を書いてみたいか。
9. 教師・雑誌編集者に対する提案
10. 出版の過程でどんなことを学んだか。

質問0：出版前から『JPLUS』や他の日本語情報雑誌について知っていた学生は少数であることが分かった。

質問1：自分の記事が選ばれて「とても驚いたが嬉しかった」「誇りに思う」「一生忘れられない経験」など11名全員から喜びの声が聞かれた。

質問2：自分の記事が選ばれたことについては11名全員が「シンガポール人／外国人にあまり知られていないから」「新しい場所だから」「商業的な場所ではなくて編集者が選びやすかったため」など場所の選択が良かったからだと考えており、自分達の日本語能力・文才が選考の要因とは考えていなかった。

質問3：11名中9名が家族や友人に雑誌を見せている。活用方法としては「将来の就職活動や日本留学の際に履歴書や面接など」「友人や旅行者用のガイド」に活用できると考えており、「今後の日本語学習の糧」「日本語学習の成果物として記念品、思い出にしたい」と考えている学生もいた。

質問4：雑誌掲載までの校正の過程については「日本人読者に分かりやすく書き直すために先生の努力が大きい」「字数制限のため自己紹介文が書きにくかった」「自分の今の日本語能力では自分のことを表現するのが難しい」とのコメントがあったが、「日本語の語彙や表現などの勉強になった」「編集は先生のお陰で円滑かつ容易に進んだ」など肯定的な意見が目立ち、ほぼ全員が校正の過程に納得していた。

質問5：もし雑誌に掲載されると知っていても11名中10名が同じ場所を選ぶであろうと答え、1名は「自然保護区など、よりシンガポールらしい場所を選んだだろう」と回答した。また、予想に反して11名中7名が読者が日本人と知っても場所紹介の書き方を変えないだろうと答えた。しかし、教師・雑誌編集者側の判断では場所の行き方の説明など明らかに現地邦人には分かりにくいと思われる内容が含まれている作品があり、結果的には校正が必要となった。4名からは日本人が読むと分かっていたら、「もうすこし努力をしたら」「場所をより詳しく説明したほうがいい」「高校時代の個人的な経験については触れず、場所紹介に止めただろう」という意見が聞かれた。

質問6：雑誌掲載と日本語学習継続の動機の関係については11名中9名が「自分の日本

語能力の低さを感じたため」「日本人や日本文化に対する興味がわいたため」「もっと日本語で書かれた記事を読みたいと思ったため」に日本語学習の動機が高まったと回答した。残りの2名は出版が決まる前から日本語学習を続ける意欲があったため、動機は変わらないと回答した。

質問7：アンケート回答の時点では11名中10名が日本語学習を続けている、もしくは今後続けたいと思っていることが分かった。

質問8：今後日本人向けに書きたい記事については「今回の記事を深めて書きたい」「シンガポールのレストランや娯楽施設について書きたいが、より高い日本語能力が必要」その他、本のレビュー、日本での経験、ファッション、旅行、シンガポールのローカルフード、シンガポールの文化・言葉・社会（新しいテクノロジーや環境への取り組みなど）、自分の専門に関することについて書きたいとの回答が得られた。

質問9：教師・雑誌編集者に対しては「雑誌掲載のスペースをより大きくする」「使用する写真の著作権についてより明確なガイドラインを学生に提示してほしい」「編集の過程を早めてほしい」「編集者は学生の名前を載せるときにもっと注意すべき」との提案があったが、全体的には現状にほぼ満足しているようであった。

質問10：学生は出版の過程でさらに日本社会・文化に興味を持ち、また、自分の日本語学習のよい動機づけにもなったようである。以下質問10の回答より一部抜粋する。原文は英文で、かぎ括弧内はその和訳である。

“Yes. I came to know that there are actually many magazines that specially catered to local Japanese people. Although I do not fully understand the contents of Jplus magazine because of my limited knowledge in Japanese, the photographs published are well taken. I am very interested in Japanese culture, especially how Japanese get along with each other and their small and delicious snacks.”

「シンガポールに住む日本人向けの雑誌がたくさんあることに気がついた。わたしの日本語知識に限りがあるのでJPULSの内容は全部は理解できないが、写真がきれいだ。特に日本人同士のつきあい方や小さくておいしそうなお菓子など、日本文化に興味を持った。」

“Through this publication, I notice about how much I need to work on my Japanese proficiency. I get better understanding of my main weaknesses in the learning of Japanese language.”

「この出版を通してもっと日本語を勉強しなければならないと思った。日本語の学習で自分の弱点についてもっとよく知ることができた。」

“Through this publication, I saw other articles in J+PLUS and it motivated me to continue learning Japanese as I would like to be able to read and understand the other articles in the magazine.”

「この出版でJPLUSに載っているほかの記事が読めるように、日本語の勉強を続けようと思った。」

“One thing I notice is that the culture and practices of Japanese are fairly different from mine and there are a lot of things that I can learn from them.”

「日本の文化や習慣は自分の文化や習慣とだいぶ違うことに気づいた。そこから学べるものがたくさんある。」

また、どんなことを学んだかという意味では質問4で次のような回答もあり、抜粋する。

“I think it’s a good learning process because I get to learn from my grammar mistakes and to learn how to write a proper Japanese article.”

「(校正は)自分の文法の間違いや日本語の記事の書き方を学ぶよい機会になった。」

“It was a good experience as I learnt to be more careful about the choice of words and a not-to-be-missed opportunity to practice the Japanese language.”

「(校正は)もっと注意深く言葉を選ばなければならないことを学べたので、日本語を勉強するのにまたとないよい機会だった。」

アンケート調査により、ガイド出版が多くの学生の日本語学習の動機付けに繋がったことが明らかとなった。ただ、最初に出版に選ばれた10名に関しては学期終了からまだ間もなく、打診をすると直ちに喜んで出版を受けるといった返事を全員からもらい、自己紹介や写真もすぐ用意ができたが、追加の8名に関しては全員がそういうわけではなかった。追加の8名が決定し、連絡をしたときは「日本語2」のコースを終了してから半年が経過していて、すでに長期休みに入ってしまった。なかなか連絡がとれず、とれても写真や自己紹介文をすぐに提出しない学生が大勢いた。また、研究に多忙である、自己紹介と写真を用意するのが面倒であるという理由で2名の学生が出版を辞退した。2名とも日本語学習継続予定のない学生で、気が抜けてしまっていたのであろうが、全員の日本語学習の励みにはならなかったようである。

5. 今後の課題

5-1 今回の出版による考察

今回の出版によって、学習者は出版された自分の記事を将来日本企業に就職する際に活用したり、また将来日本人と話す際に話題を提供することができるであろう。また、ほとんどの学生は出版までにこの地域日本語雑誌を知らなかったが、地域日本語雑誌を見ることでシンガポールの日本人社会を垣間見ることができ、異文化理解の一端になったようだ。この出版で日本人との直接のつながりができたわけではないが、日本人読者にとっても初級学習者が日本語で書いた作品を読むことで、シンガポール人やシンガポールの社会文化の理解につながり、双方にとって有益な結果を生むのではないだろうか。

ガイド文の校正については、学期中は教師がたいていの間違いには直接修正せずにヒントのみを与え、学生に自己修正をさせていた。教師が一方的に修正してしまえば学生は

理由も考えずただ書き直すことが多いが、ヒントのみ与えることで学生は語彙や文型を確認せざるをえず、教育的に有効であると考え。しかし、うまくヒントを与えないといつまでたっても不自然な日本語のままの場合もある。学期中の添削とはいえ、一般日本人が読者であることを想定して基準を厳しくしたり、ヒントの与え方を改善する必要もあるだろう。編集者には学期中に書き上げたままのPDF原稿のものを読んでもらっていたが、実際に出版するとなると、一般日本人読者が読んでもあまり違和感がないようにする必要がどうしてもある。そのためには教師が学生の意図を確かめながら手を入れ、学期中に添削したものよりさらに深めてから編集に回す努力も必要であると考え。

学生は教師が提示する修正はほとんど疑いなく受け入れるのが現状であるだけに、教師は他者から提示された修正案をそのまま学生に提示するのではなく、よく吟味し、できれば代替案もあわせて学生に提示すべきであろう。また、教師自身は一般日本人の語感を決して失ってはならないが、学生自身の言葉を守ることは教師にしかできないことも自覚するべきであろう。

5-2 今後の活動の可能性

今後の活動の可能性として、実践研究フォーラムで発表したポスターの閲覧者の中から実際に日本人をガイドブックの場所へ案内する交流プロジェクトにしてはどうかとのアイデアもいただいた。授業時間内に案内するのは無理かもしれないが、休日などに日本人を案内してレポートを書かせるなど、総合的なプロジェクトにつながられるかもしれない。また、「懐かしい思い出の場所」や「昔の遊びについて」書かせてはどうかとのアイデアもいただいた。これらは初級学習者にも適切なプロジェクトになる可能性があるだろう。しかし、当大学は中国やマレーシアをはじめ世界のさまざまな国の出身の学生が多く、必ずしもシンガポールのことにはならないだろうから、地元日本語情報誌への出版の機会は公平にならないかもしれない。

今回の出版はこのプロジェクトを行った学期が終了してから決定したが、プロジェクトの初めに出版の可能性があることを学生に伝えておけば、より生きた日本語を使用する機会となり、学習意欲もさらに高まったかもしれない。ただ、今回の出版では地元日本語情報雑誌の広告主と競合するような場所は編集者から選ばれなかったが、次回に出版を念頭に入れて同様のプロジェクトをするなら、初めから学生に広告主と競合するような場所を避けるよう指示をするのか、しないのかという問題もある。今回のプロジェクトでは「わたしの好きなところ」として多くの学生が飲食店の紹介を紹介しており、出版のために場所の制限をするのは忍びがたい。また、出版を前提にしてプロジェクトを行う場合、学生自身に内容をもう少し深く考えさせることも可能であるだろうが、それには同時に教師からシンガポール在住邦人に関する情報を与える等の工夫をすることも必要であろう。

海外の限られた日本語学習環境において、メディアはうまく利用すれば学習者の動機を高めることができ、生きた日本語使用機会を与えられる可能性を大いに秘めている。しかし、あくまでもメディアは学習のツールであることを教師がよく理解し、メディアに振り回されることのないよう学生の学習効果が最大限にあげられるプロジェクトにするべきであると考え。

謝辞

このプロジェクトの前身である「わたしのシンガポールガイドーわたしの好きな店」を考案・実践したシンガポール国立大学の齋藤亨子氏に謝辞を表します。

注

- (1) 「外務省」海外在留邦人調査数統計（平成21年速報版 平成20年10月1日現在）
<<http://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/tokei/hojin/09/pdfs/1.pdf>>（2009年9月20日）
- (2) シンガポール日本人学校
<<http://www.sjs.edu.sg/>>（2009年9月20日）
- (3) 3A Corporation eds., 2002. *Minna no Nihongo Elementary 1-2 Main Textbook Asian Edition*. Malaysia: 3A Corporation.
- (4) スリーエーネットワーク編(1998)『みんなの日本語初級 I 本冊』スリーエーネットワーク
- (5) タム・キットエン(2009)「What's Hot in Singapore? 貯水池でカヤック体験」『JPLUS』142号, 18
- (6) リム・イエンピン(2009)「What's Hot in Singapore? 週末はアイススケートに行こう」『JPLUS』143号, 24
- (7) チャン・ンガーイン(2009)「What's Hot in Singapore? 可愛い動物を見に行こう」『JPLUS』144号, 22
- (8) ウォン・チューレイ(2009)「What's Hot in Singapore? ロマンチックな夜を過ごすには」『JPLUS』145号, 36
- (9) リム・リミン(2009)「What's Hot in Singapore? エスプラネードのオツな楽しみ方」『JPLUS』146号, 22
- (10) ホー・チアチン(2009)「What's Hot in Singapore? アートとエンタメを同時に楽しむなら」『JPLUS』147号, 32
- (11) タン・メイティン(2009)「What's Hot in Singapore? シンガポールで見つける穏やかな自然」『JPLUS』148号, 26
- (12) タン・ズンシアン(2009)「What's Hot in Singapore? 釣り堀で釣った魚を食べましょう！」『JPLUS』149号, 30
- (13) ハン・フイミン(2009)「What's Hot in Singapore? 東南アジア初のリュージュへ！」『JPLUS』150号, 24
- (14) コー・ホンチュエン(2009)「What's Hot in Singapore? 美しい日の入りを見に行こう」『JPLUS』151号, 24
- (15) タン・チアンコン(2009)「What's Hot in Singapore? 棧橋へ出かけよう」『JPLUS』152号, 22
- (16) チュン・シャロー(2009)「What's Hot in Singapore? 自然の中でリフレクソロジー」『JPLUS』153号, 26
- (17) ルワ・ウォンキー(2009)「What's Hot in Singapore? マイナスイオンたっぷりの場所」『JPLUS』154号, 24

- (18) タン・アイザック (2009) 「What's Hot in Singapore? 自然, ダイスキ!」『JPLUS』155号, 34

参考文献

- (1) 矢野葉子 (2004) 「学習者の日常生活を考慮した海外における初級日本語教育: シンガポールを例として」『昭和女子大学大学院日本語教育研究紀要』2号, 110-117
<<http://ci.nii.ac.jp/naid/110004683756>> (2009年5月27日)
- (2) Harrison, Richard. 2008. Media And Mediation: Teachers, Learners And Learning Environments. In Chan W. M. et.al. eds., Proceedings of CLaSIC 2008: Media in Foreign Language Teaching and Learning., 204-209. Singapore: Centre for Language Studies, National University of Singapore